
プロジェクト報告

「タキ・オンコイ」への疑問から アンデスの「歌」を分析する

佐々木直美

1. はじめに

2024年度国際研究センター文部科学省補助金プロジェクト「人新世における持続可能な世界のあり方をペルー・アンデスの人々から学ぶ」において、筆者はペルー先住民が伝承してきた「ケチュア語」による儀礼と歌に着目し、それらの分析を通じてアンデス先住民が築いてきた自然とのかかわりについて考察を行った。具体的に考察の対象としたのは、「踊り病」と訳されることが多い「タキ・オンコイ」と呼ばれる事象である。タキ・オンコイは1564年ころから1570年代はじめにかけて、中央アンデス南部（現在のペルー、アヤクチョ県周辺）で生じたとされる千年王国的運動である、との解説が一般的である。そしてこの運動の参加者が歌と踊りのトランス状態に入り激しく歌い踊ったとされることから、先住民による文化的抵抗の象徴として語られ、しばしば現代に生きる民族舞踏「ハサミ踊り」¹⁾の起源とも紹介される。しかし他方では、史料を冷静に分析し、タキ・オンコイを先住民の抵抗運動に安易に関連付ける議論に疑義を呈する堅実な研究²⁾があり、本研究はその立場を支持しつつ二つの点において問題を提起した。

一つは、名づけ問題である。だれがこの名前を付けたのか、という問いである。ケチュア語表記「Taki Onqoy」は、インディアス総文書館でこの一次資料に出会ったペルー人歴史人類学者ルイス・ミリヨネスの研究によって広まった。ミリヨネスはこのケチュア語について文字通りスペイン語に訳せば「enfermedad del canto」であると述べた³⁾。

1) ハサミ踊りについては、佐々木（2018、2023）を参照されよ。

2) 詳細は網野（2017：221）を参照されよ。

3) Millones(1989:5)

つまり「taki = canto (歌)」、「onqoy = enfermedad (病)」ということである。しかし、タキ・オンコイが支配に対する先住民たちの抵抗運動であるならば、なぜそれが先住民の言語で「病」と呼ばれるのか？ 意図的に行っていることがらを当事者が自ら「病」と呼ぶことに筆者は疑問を抱いた。病ならば治療し、その状況と関係を絶つことを望むはずである。このような視点から、当該事象がなぜ、誰によって「病」と呼ばれたのかについて改めて史料を精査する必要を指摘した。

二つめは、一次資料に表われる「タキ・オンコイ」の別名「アイラ」について検討する必要性を提起した。別名「アイラ」については、それほど注目されてこなかったため、本研究において「アイラ」とは何かを探ることによって「タキ・オンコイ」の実像に僅かでも迫ることを意図した。そして「アイラ」が儀礼的歌をさすことがわかったため、その歌の分析からアンデスの民と自然との係わり方を読み解くことを試みた。

2. 史料の読み直し

タキ・オンコイに関して16世紀に記された史料のなかでも、一次資料として最も価値があり注目されるのはクリストバル・デ・アルボルノスが1570年、1577年、1584年に記した「業績調書 (Información de servicio)」である。インディアス総文書館に所蔵されるこれらの手書き文書の翻刻版にはミリヨネス⁴⁾版とランダ⁵⁾版がある。筆者は両方の版を確かめ、タキ・オンコイがどのように記されているかを検証した。その結果、「業績調書」が記された年ごとにタキ・オンコイの綴りとその内容に関する記述が異なっていることがわかった。最初にタキ・オンコイに言及した1570年の「業績調書」は、この事柄について「別名アイラ」と呼ばれる背教的セクトであり、キリスト教の拒否とアンデスの神格「ワカ」の復活と勝利を吹聴するものであると述べている。1577年には、それはアルボルノスが発見した「新たな」セクトであることが強調されており、1570年に記された内容に加えて、「ワカ」の憑依や儀礼的行為の記述が出現する。1584年には、「輪になって踊る」、「震える」という憑依の様子や憑依された者の顔に「朱が塗られる」といった具体的な内容が特徴的である。いずれにしても、アルボルノスの資料からは、なぜ「病」とよばれるのか、誰が「病」と呼んでいるのかは明らかではない。

アルボルノスによる偶像崇拜根絶巡察に仕えたと主張する先住民ワマン・ポマもその著名な著作『新しい記録と良き統治 (*El primer nueva crónica y buen gobierno*)』のな

4) Millones(1990) (2007).

5) Landa(2018)

かでタキ・オンコイについて触れている。ケチュア語を母語とするポマ自身は「taqui oncuy」と記し、偽の呪術師たちがでっちあげた「病」と述べる。また、この病はインカ時代からあったと記しており、みずからの「発見」の「新しさ」を殊更に強調するアルボルノスの主張とは食い違っている。

3. アイラについて

アルボルノスの史料に別名「ayra」と記されているものは何か？この疑問を解くためにはケチュア語表記の揺れに注意を払う必要がある。文字を持たなかったケチュア語を文字化する場合、スペイン語表記が使われてきた。16世紀当時は、スペイン語表記自体の揺らぎも残ることから、「ayra」と音韻的に類似するケチュア語を探り、その結果「ayla」と「qayra」を考察の対象とした。

ayla は、ペルーを代表する作家ホセ・マリア・アルゲダスの短編小説のタイトルとしても知られている。もともとは、中央アンデス南部のアヤクチョ県プキオ村で開催される祭り期間に特有の踊りである。月明りのもと、仲間同士で帽子やボンチョを取り換えて身元を隠し、音楽に合わせて身体を動かしながら、密やかにカップル成立を楽しむ。相手を射止めた者は、慕う相手と一夜を明かすことが許される独身男女の踊りである。

qayra も同じく踊りである。アヤクチョ県アンダマルカ村で開催される「水の祭り」において、祭りの最後に村人老若男女が手をつないで輪になって踊る。アンダマルカ村のアイデンティティのよりどころともなっている。筆者もこの水の祭りを調査し、実際に村人たちと qayra を踊った経験がある。

ayra についてはアブドン・ヤランガ⁶⁾による記述があり、アヤクチョ県で家畜儀礼の際に披露される歌であることが分かった。ヤランガは、フィールドワークにおいて複数の「ayra」の歌詞を採取しているため、ケチュア語で記されたそれらの歌詞を本研究の分析対象とした。その結果、アイラの歌詞においては人間・動物・精霊の対話が順番に行われていることが確認できた。それらの歌詞はすべて女性のみが歌うとされるが、人間が非人間（動物・精霊）のパートも歌い、非人間（動物・非精霊）が擬人化される。このことは、ayra の意味を「変化」とするヤランガの根拠を示すものであると言えよう。歌のなかで歌い手である人間は非人間になったり、非人間から人間になったりするのである。

6) Yaranga(1994)

また、「変化」は独身男女の踊り ayla にも関連する。独身からカップル成立という状況は、子孫繁栄につながる状況への「変化」であり、その意味では家畜の繁殖儀礼に歌われる ayra と人間の男女のカップル成立を促す ayla 踊りは同じ文脈で語ることができる。

4. おわりに

本研究の目的は、ケチュア語による儀礼の歌を分析し、そこから人と自然の関わり方について新たな視点を得ることであった。家畜儀礼 ayra の歌を分析してわかったことは、アンデスの民は「人間」と「非人間」による対話が成立することを歌によって示しているということであろう。ayra を分析することは、人類学における存在論的転回の枠組みからアンデス世界を理解するアプローチの一つであることが、本研究によって示された。

植民地期のスペイン人や現代の研究者によって千年王国運動とされた事象は、ayra を手がかりに検討すると、家畜繁殖儀礼という全く異なる意味を持って実践されていた可能性がある。アンデスにおける人間と非人間の相互影響についてさらに理解するには、ayra の対話の内容と形式についてさらに検討する必要がある、ayra の歌詞収集も今後の課題である。

なお、本研究の内容については、2025年7月に開催されたアンデス・アマゾン学会において口頭発表を行った。

引用文献

- Arguedas, José María. (1988). *El ayla en Relatos Completos*. Madrid: Alianza Editorial.
- Guaman Poma de Ayala, F. (s.f.). *DEL KGL.BIBLIOTEK*. Recuperado el 25 de Agosto de 2025, de The Guaman Poma Website : <https://poma.kb.dk/permalink/2006/poma/info/en/frontpage.htm>
- Landa, Ladislao. (2018). *Mesianismo y utopía en America: Perú, siglo XVI*. Lima: Yalanda Carlessi.
- Millones, Luis(ed.). (1990). *El Retorno de las huacas. Estudios y documentos del siglo XVI*. Lima: IEP.
- Millones, Luis. (1989). *Mesianismo e idolatría en los Andes Centrales*. Buenos Aires: Editorial Biblos.
- Millones, Luis. (2007). *Taki onqoy: de la enfermedad del canto a la epidemia*. Santiago: Centro de investigaciones Diego Barros Arana.
- Valderrama, Yaranga, A. (1994). *El tesoro de la poesía quechua Hawarikuy Simipa Illan*. Madrid: Ediciones de la Torre.
- 網野徹哉. (2017). 『インディオ社会史 アンデス植民地時代を生きた人々』, 東京: みすず書房.

- 佐々木直美. (2018). 「ペルー無形文化遺産＜ハサミ踊り＞に関する歴史的考察」, 『言語と文化』[法政大学 言語・文化センター] 15: 55-70.
- 佐々木直美. (2023). 「ハサミ踊りの民族誌」, 『言語と文化』[法政大学 言語・文化センター] 20: 43-57.